

FLORA KANAGAWA

神奈川県植物誌調査会ニュース 第22号 Oct. 6. 1986

231 横浜市中区南仲通5-60

神奈川県立博物館内

振替 横浜 3-10195

No. 22



Verbena bracteata Lag. et Rodr.



● ミナトクマツヅラ (新称)

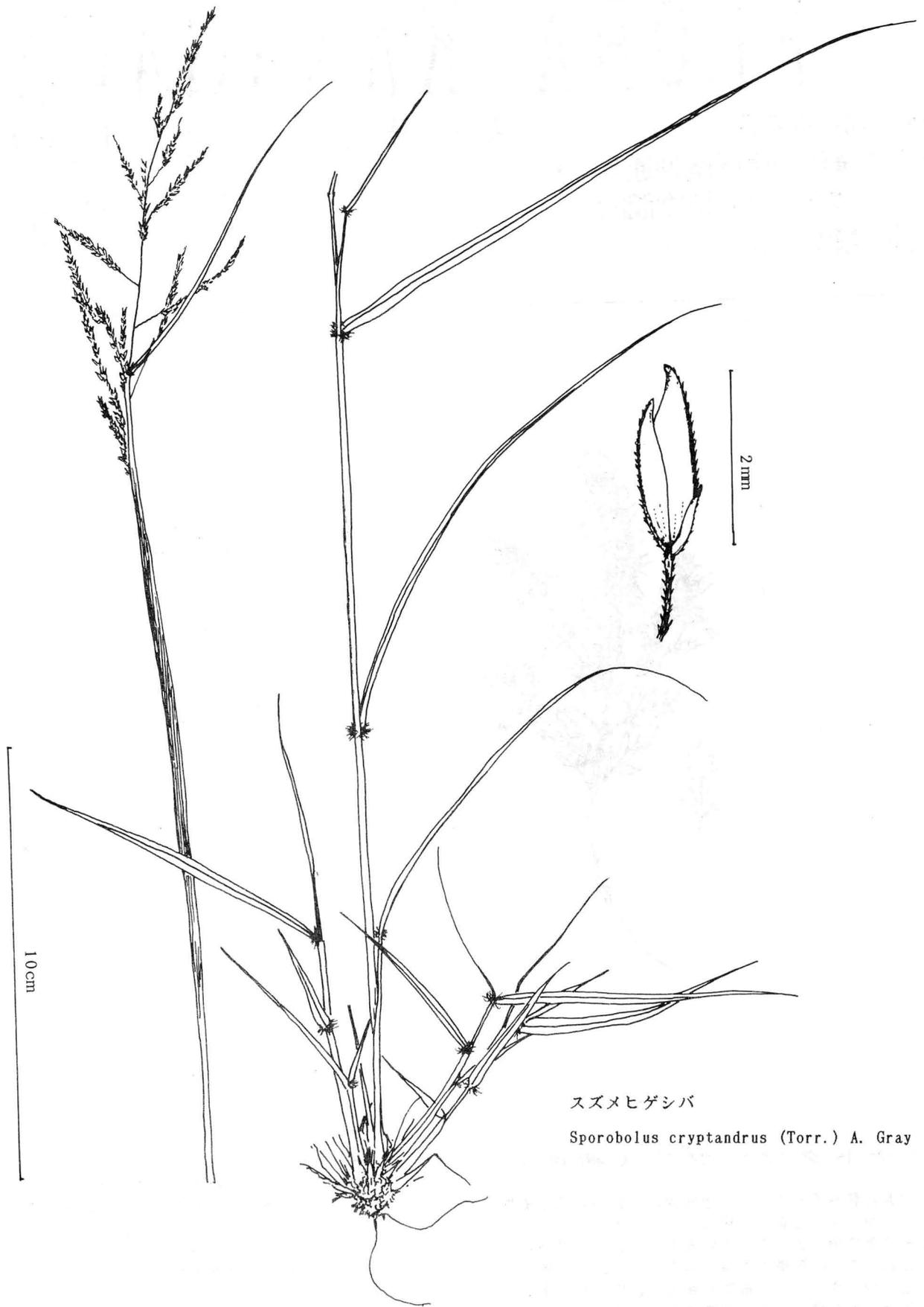
神奈川県は貿易港を控えた土地柄故に、昔から帰化植物が多く、次から次へと新しい植物がやってきて、多くのものは1-2年で消え去ってしまいます。これを片端から記録するという事は難事ですが、神奈川県では浅井康広先生が、古くから様々な帰化植物を報告されており、また本会の森茂弥先生も横浜、川崎地区で沢山の新しい帰化植物を発見されています。植物誌調査も終盤を迎え、あらかたの標本は名前が付いて、棚に収まっているのですが、若干、どうしても名前が付かない標本が残っております。その一つは不完全な標本、残りは新しい帰化植物と目されるものです。

頼りの森先生が病気でご休養中ですので、非力ながら、若干の標本について、おおよその見当をつけてみました。本号ではそれを特集しました。身近な宅造地などにまだまだ新しい帰化植物が眠っているかもしれません。もう一度お近くを見直して下さいれば幸いです。

このミナトクマツヅラと仮に名づけたものは、森茂弥先

生が横浜市神奈川区出田町で1981年6月30日に採集されたもので、高さ8cmほどの小さな草です。植物体全体に開出する粗毛が多く、一見ムラサキ科の植物のように見えますが、葉は長さ2cm内外で、基部で3裂し、対生しています。ムラサキ科は葉が全縁で互生するのが基本です。またハゼリソウ科は、ムラサキ科に近くて、葉が切れ込むのですが、葉は互生です。結局クマツヅラ科のものではないかと思当をつけて調べたところ、*Verbena bracteata* Lag. et Rodr. (*V. bracteosa* Michaux) のように思われます。まだほかで記録されていないようなので和名をミナトクマツヅラとしておきます。本種は北アメリカの植物でフロリダからメキシコにかけての地域原産のものと思われそうですが、カリフォルニアからブリティッシュ・コロンビアにかけても広がっているようです。Britton & Brownによれば大西洋岸の港の砂利の多い所に見られる、とあります。ちなみに出田町は埋立地の埠頭です。

出田町の標本は小さな個体で、直立していますが、大きく育つと匍匐するようです。花は極く小さく、物の本によると青色とのことです。(大場達之)



スズメヒゲシバ

Sporobolus cryptandrus (Torr.) A. Gray

● スズメヒゲシバ (新称)

これは川崎市高津区におすまいの小崎昭則さんが、二宮町一色で採集されたものです。一見スズメガヤ類に似ており、葉鞘の口部に開出した毛の有るところなどは、オオニワホコリのような外見ですが、小穂をみると、苞穎、護穎に光沢があるところなど、これもスズメガヤ的なのですが、一つの穂に1小花しかありません。スズメガヤ属では小穂は多数の小花からできています。スズメガヤ属に近縁で、1小穂が1小花からできているものを調べたところ、ネズミノオ属の *Sporobolus cryptandrus* (Torr.) A. Gray に違い

ないということになりました。北アメリカの西岸の乾いた環境に広く分布し、北アメリカの他の地方にも広がっているようです。

直立した硬い感じの草で、穂の基部は紫色を帯びます。大きなものは1mに達するようです。記載を長々書くよりは、図のほうがはるかにわかりやすいので、図をご覧下さい。

和名はスズメガヤの雰囲気を持ったヒゲシバ類であるという意味です。ヒゲシバはネズミノオ属の小さな一年草で、痩せた裸地に生えます。神奈川県では比較的稀ですが、箱根仙石原には多く見られます。(大場達之)

●メリケンニクキビ

スズメノヒエ、ナルコビエなどの仲間は、穂が独特で、他のイネ科植物との区別がはっきりしています。この仲間にはもう一つビロードキビ属というのがあって、琉球にニクキビ、ビロードキビなどの種類が帰化しています。小崎昭則さんは、さきのスズメヒゲシバと同じ二宮町一色で、ビロードキビ属の一種を探られました。取り調べの結果、これを *Brachyaria platyphylla* (Grieseb.) Nash. と同定しました。日本には新しい種類かと思いましたが、すでに沖縄でメリケンニクキビの名が与えられていました。これは北アメリカの南部から南アメリカにわたって分布する種類で、もう一つよく似たものに *Brachyaria plantaginea* (Link.) Hitchcock という種類がありますが、こちらの方はまだ日本に入っていないようです。

●ハハコグサ属

ハハコグサ属には帰化種が多く、その見分けが難しいうえに、学名や和名の適用が混乱していて、頭の痛いグループの一つです。今回セイタカハハコグサという新参ものが現れたので、少し勉強し直してみました。まだよくわからないところが多いのですが、仮に神奈川県植物誌の試行形式でまとめてみました。(次ページ)

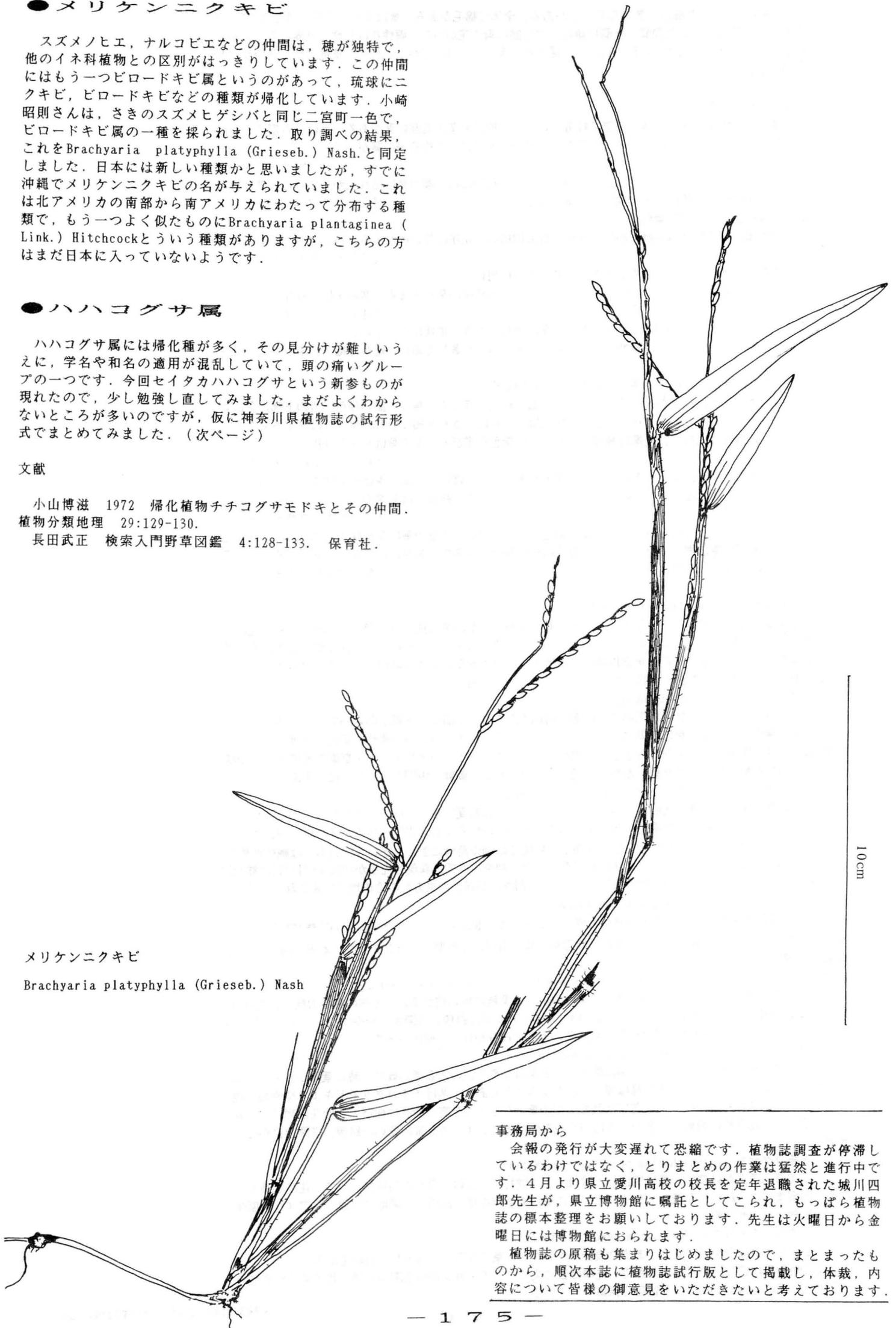
文献

小山博滋 1972 帰化植物チチコグサモドキとその仲間。
植物分類地理 29:129-130.

長田武正 検索入門野草図鑑 4:128-133. 保育社.

メリケンニクキビ

Brachyaria platyphylla (Grieseb.) Nash



事務局から

会報の発行が大変遅れて恐縮です。植物誌調査が停滞しているわけではなく、とりまとめの作業は猛然と進行中です。4月より県立愛川高校の校長を定年退職された城川四郎先生が、県立博物館に嘱託としてこられ、もっぱら植物誌の標本整理をお願いしております。先生は火曜日から金曜日には博物館におられます。

植物誌の原稿も集まりはじめましたので、まとまったものから、順次本誌に植物誌試行版として掲載し、体裁、内容について皆様の御意見をいただきたいと考えております。

1年草～多年草。茎の基部は木質になることがある。全体に綿毛がある。葉は互生、全縁。頭花は小形で群がって着く。総苞片は乾いた膜質。外側に雌花、中心部に両性花が付き、両性花は稔性。世界に広く分布し約200種が知られ、中国に20種、日本には帰化種を含めて9種ほどがみられる。草地、畑、路傍など明るい環境に生える。

1. 総苞は鮮やかな黄色。

2. 花は主として春に咲く。茎は基部で枝分かかれし、花期にも茎の基部に葉がある。葉はへら形で、上面にも綿毛があって白っぽい。茎の下部から花序の下までに10枚前後の葉がつく。

(1) ハハコグサ

2. 花は10～11月に咲く。茎は上部で枝分かかれし、花期には下部の葉は枯れ上がっている。葉は線形で、上面は緑色。茎には30枚以上の葉がある。

(2) アキノハハコグサ

1. 総苞は帯褐色または帯紅紫色。

2. 茎の中部に着く葉は、長楕円形で、基部が最も巾広い。花序は長い柄がある。ハハコグサに似ている。

(3) セイタカハハコグサ

2. 茎の中部の葉はへら形で、先広である。花序の柄は短い。

3. 多年草。匍匐枝がある。花序は頭状で、星状に3～5個の葉が集まる。茎の葉は10枚くらい。

(4) チチコグサ

3. 1～2年草。花序は細長く穂状。花序の葉は離れてつき、星状にならない。

4. 花序の葉は線形または狭披針形で、茎の下部の葉より著しく細い。総苞は褐色。茎の葉は7～8枚。

(5) タチチチコグサ

4. 花序の葉はへら形で、茎の下部の葉とほぼ同じ形。

5. 葉の下面は綿毛が多く著しく白い、上面は綿毛がほとんど無く、濃い緑色。茎の下部の葉は幅広く、基部もあまり狭まらない。総苞は上部がはっきりと細くなり、重なりはタイトである。総苞片は幅広く、先端は鈍頭、若いとき紅紫色を帯びる。茎の葉は6～10枚。

(6) ウラジロチチコグサ

5. 葉の下面は白綿毛がある、上面も綿毛があって白っぽい。下部の葉は基部狭まってへら形。総苞は上部で細まるが、総苞の重なりはルーズである。総苞片は先端やや尖る。茎の葉は3～6枚。

(7) チチコグサモドキ

5. 葉の下面は白綿毛がある、上面も綿毛があって白い。下部の葉は基部狭まってへら形。総苞は上部で急に細くはならない。総苞片は鮮やかなバラ色で、先端ははっきりと細く尖る。茎の葉は10～18枚。

(8) ウスベニチチコグサ

(1) ハハコグサ *Gnaphalium affine* D. Don

1～2年草。茎は下部硬く、少し伏臥してから立ち上がる。茎の葉は狭いへら形で茎に沿下する。花は春であるが、他の季節にも少しずつ咲いている。シイ・カシ帯からクリ帯にかけての肥沃な畑、道端、庭、都市空閑地などに普通に見られる。神奈川県分布型：ハハコグサ型。シロザ群綱・ツユクサ群目の標徴種。日本全土に広く分布し、朝鮮、中国、マレーシア、インドに分布。

(2) アキノハハコグサ *Gnaphalium hypoleucum* DC.

2年草。ロゼットはへら状長楕円形で、両面に白綿毛があり、上面には3脈が明らかである。茎は硬く、直立。葉は開出し、下部の葉は花期に枯れて茎に着いている。シイ・カシ帯の痩せた草地、裸地に生える先駆植物で、特に関東ローンを削ったところに現れる。ハタガヤイトハナビテンツキ群綱の標徴種。やや稀。神奈川県分布型：ハハコグサ型。本州、四国、九州に分布し、朝鮮、中国からインドにおよぶ。

(3) セイタカハハコグサ *Gnaphalium luteo-album* Linn.

1～2年草。茎は下部硬く伏臥し、多く枝分かかれする。花は初夏に咲く。ハハコグサによく似て、やや大形、花序の柄が長く、総苞が帯褐色、茎の葉は基部で最も巾が広がる。北アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、アジアの中部、西部などに広く分布し、中国では畑や路傍に生えるという。日本では戦後沖縄に帰化し、初島住彦がセイタカハハコグサの和名を与えた。神奈川県では森茂弥先生が1981年6月30日に鶴見区の大黒埠頭で採られ、その後1986年5月25日に、小崎昭則さんが緑区の東方町の造成地で採集されている。

(4) チチコグサ *Gnaphalium japonicum* Thunb.

多年草。花は主として初夏であるが秋にも咲く。シイ・カシ帯からクリ帯の芝地、乾いて痩せた所にみられ、やや普通。ススキ群綱・シバスケ群目の標徴種。神奈川県分布型：ハハコグサ型。本州、四国、九州、朝鮮、中国に分布。

(5) タチチチコグサ (ホソバナチチコグサモドキ) *Gnaphalium calviceps* Fern.

1～2年草。茎は基部で枝分かかれし直立。葉は斜上し、葉腋に短い枝が多い。上部の葉は巾狭い。花は夏。頭花は長さ3mm位で、先が急に細まることはない。シイ・カシ帯の路傍、空閑地。やや少ない。神奈川県分布型：北アメリカ原産の帰化植物。時に茎の上部で枝分かかれする個体がある。

(6) ウラジロチチコグサ *Gnaphalium spicatum* Lam.

1～2年草。根生葉が目立つ草で、葉は開出し、表面はやや光沢のある濃い緑で、時に葉脈が打ち込みに入っている、下面は著しく白い。葉の縁は細かく波曲することもある。茎はチチコグサモドキよりやや細く硬い感じがある。花は初夏に咲く。花序は最も上部の葉よりもずっと高く穂状に伸びる。頭花は硬く引き締まった感じで、総苞片は鈍頭で、若いときはバラ色を帯びる。シイ・カシ帯の乾いた路傍、空閑地にかなり普通。

(7) チチコグサモドキ *Gnaphalium pensylvanicum* Willd.

1～2年草。柔らかい草で、葉は開出し、縁はすこし波打つ。花は初夏から初秋にかけて。花序は最も上の葉と同高またはそれよりも低い。シイ・カシ帯の肥沃で適湿な畑、路傍、空閑地に普通。北アメリカ原産の帰化植物。シロザ群綱。

(8) ウスベニチチコグサ *Gnaphalium purpureum* Linn.

1～2年草。茎はやや硬く直立しあまり枝分かかれしない。葉は数多く、斜上し、白綿毛が多い。花は夏に咲き、総苞片は美しいバラ色で、先端は鋭く尖る。シイ・カシ帯の空閑地に稀。北アメリカ原産の帰化植物。横浜市の保土ヶ谷区と緑区で採集されている。

* 神奈川県における分布型は仮のものです。

+-----+
Gnaphalium affine D. Don



ハハコグサ

+-----+
Gnaphalium hypoleucum DC.



アキノハハコグサ

+-----+
Gnaphalium luteo-album Linn.



セイトカハハコグサ

Gnaphalium japonicum Thunb.



チチコグサ



セイトカハハコグサ



ハハコグサ

アキノハハコグサ

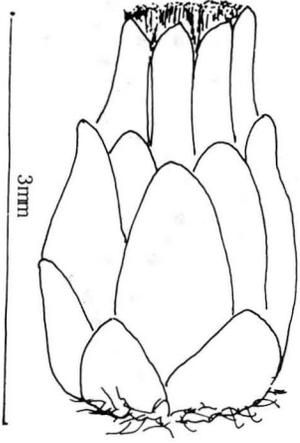
チチコグサ

頭花

ウスベニチチコグサ

+
Gnaphalium calviceps Fern.

ウラジロチチコグサ

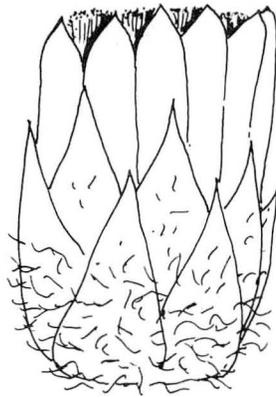
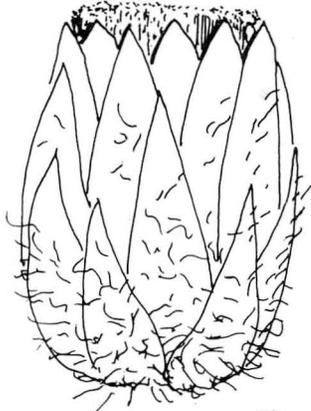


タチチコグサ

+
Gnapharum spicatum Linn.

チチコグサモドキ

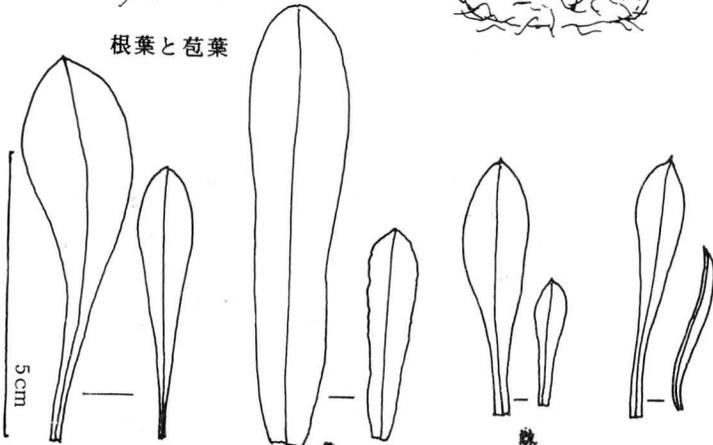
タチチチコグサ



ウラシロチチコグサ

根葉と苞葉

+
Gnaphalium purpureum Linn. var. *spathulatum* Bak.



チチコグサモトキ

+
Gnaphalium purpureum Linn.



ウスベニチチコグサ

ウラジロチチコグサ

タチチチコグサ

チチコグサモドキ

ウスベニチチコグサ